

## 赤川浩爾先生の思い出

M③⑥ 浅野 等

私が赤川先生の研究室に配属されたのは1987年（昭和62年）であり、赤川先生が定年を迎えられる最終年度にあたる。当時、配属は学生の希望順で行われ、第1志望が多い場合はじゃんけんで決定された。私が希望したのは、熱流体現象に興味を持っていたこと、講義で非常に丁寧に教えていただいたことによる。第1希望では、約1.5倍の競争率であったが、無事に勝ち抜くことができ配属されたのは幸運であったと思う。失礼ながら、講義の内容はすっかり忘れてしまっているが、板書での式の記述はとにかく丁寧に、落ち着いた口調でしっかりと講義いただいた印象が強く残っている。その後、2006年に神戸大学で講演いただくまで幾度か赤川先生の講演を聞く機会があったが、その口調、雰囲気に変化はなかったように思う。

研究室では、卒業研究として二相膨張ノズルを用いたヘロータービンの性能特性に携わったが、研究内容と方針はほぼ決まっており、また藤井照重先生、太田淳一先生に直接指導いただいていたこともあり、学部では赤川先生と直接議論することはほとんどなかった。講座全員での研究会も記憶にないが、研究室の野球大会に参加されたことがあった。学生時代に陸上部であったとのことで、靴も持参され、何故か代走で参加された。投球とともにスタートをされるが、バッターがファウルをするため何度か行き来されていたが、平然とこなされていた。

赤川先生と直接話をする機会があったのは、私が修士2年生になってから参加した国際会議であった。台湾の台北で開催された **International Conference of Mechanics of Two-Phase Flows** で赤川先生と連名の論文を発表させていただいた。当時、修士の学生が国際会議に出席できるというのは珍しく、その会議でも修士学生はいなかった。伝熱シンポジウムを終えての参加であったが、学会講演の経験も浅く、ましてや国際会議での初めての講演であり、会場での居場所も定まらず心細くしていた。昼食時に声をかけていただき話をすることができた。その時には大学での研究の話聞き、博士課程に進んではどうかとも言っていた。結局、進学せず、企業に就職したのだが、就職して確か2年目に伝熱学会関西支部の行事で龍谷大学（赤川先生が退官後、龍谷大学理工学部設立に尽力され、当時教授に就かれていた）を訪問することがあった。その時にごあいさつしたのだが、“どうして君はここにいるのですか”と丁寧にあったが、きつい一言を頂いた。見学会では、並列管の空気-水二相流実験装置、学生に作らせているというホバークラフトの話を聞いた。この時も、製作のポイントなど丁寧に教えていただき、いろいろな工夫で純粋に研究を楽しんでおられるように感じた。

赤川先生が叙勲を受けられたあと、神戸大学において開催された機械工学科と機械クラブ共催の講演会で講演されたが、その打ち合わせに自宅を訪問した時にも、研究の話を色々していただいた。驚かされたのは、話の中で出てきた話題について、ちょっと資料をとってくると書斎に行かれ、すぐに古い資料を持ってこられたことである。これが、何度かあった。これまでされてきた研究が積み上げられており、頭のだけでなく資料もしっかりと整理されていたのだと思う。

会話をするときにも偉そうにされることなくフラットに教えていただいた。私が大学院生の頃の国際会議でもそうであった。研究を直視されていた先生の姿勢がそうさせていたのだと思うとともに、赤川先生のような研究者であるように努めたいと思う。

( 終 )

追悼文受付日：平成 28 年（2016 年）11 月 14 日 赤川先生－27